

316

廿六年一月十八日內務省許可

佛法
大海

寸管窺天鈔

の
第二編

因果智慧光和梵

因果智慧鏡

見興
大師降誕會讚歎歌

因果智慧光和讚

小泉 祐山



凡そ此世に生れてそ
皆是過去の報ひと
教への智慧に鏡よて
過去の未來も明らりよ
鏡に虚なきゆゑよ
現在此世に見ゆるあり
佛の教へに順ひて
過去の十來説からは

善も悪敷も押あべて
兼て佛けの教へかり
今に曇らぬ因果經
三世因果の鏡あり
寫る相たの正敷は
今其智慧の鏡より
因果の道理を明白に
遠はきあらき近きあり

近き此世よ有かか
 先其娑婆の景況の
 高位高官よ生れ來て
 過去世の三寶供養より
 復へ下劣よ生れ來て
 過去世を驕慢深をして
 壽も長を末廣く
 過去世の慈悲の功德より
 壽も短く子もあきと
 亂りよ物を殺そゆゑ
 知らしめ玉ふぞ難有や
 人よ敬ひ受る身の
 禮拜尊重の善とある
 人よ下けをみ受る身と
 人を慢る報ひあり
 子孫繁昌榮へるの
 此世の長久の人となる
 過去世を慈悲の心なく
 殺生業の報ひあり

或ひの富貴よ生れ來て
 三寶恭敬の心より
 復へ貧苦よ生れ來て
 せながら餓鬼の景況を
 耳も聞ひす目も見へせ
 見佛聞法の嫌ひより
 瘡やま、おく其者の
 瘡瘡よ此世の生れ來て
 或ひと具足よ生れ來て
 過去の持戒の功力よて
 財福豊りよ暮を身の
 布施善根の果報なり
 形も人よ似たれども
 慳貪邪見の報ひなり
 六根不足の其過去を
 此世の聾盲の者とある
 佛法誹謗の報ひより
 人よ愧りく身ととある
 身軀心の儘なるを
 修善修徳の果報あり

美目も形も世に勝れ
人の情けの恵みより
是ぞ過去世の十來と
此故因果を辨ひて
後の用意の一大事
未來の重き三惡道
吾と趣く未來よて
其時誰を恨むべき
今更ら外よ力らあく
報ひと受る其時の

諸人よ愛と受る身は
忍辱柔和善果あり
佛けも御經よ教へしむ
娑婆よ存ひある中よ
後の用意のなき者の
自ら造る罪科よ
自業自得れ罪かれは
いりよ後悔せるとても
泣々報ひと受るべし
八大地獄の呵責なり

炎は猛火の火攻よて
一百三十六地獄
等活地獄は人間の
夫より無間の八万劫
別處合て是も亦
是ら紅蓮の氷り攻
次の餓鬼道是も亦
一万五千の其間た
飲んとすれば水は火と
畜生道の景況の

別處々々の數迄の
輕ひ地獄の初えさへ
九百万年一夜よて
外よ其上へ八寒と
一百三十六地獄
何れも日間をさ攻苦なり
娑婆の五十と一夜と
飢渴寒ひの苦るしみの
食事も炎はと變るなり
互ひくの殺害よ

喰ひつ喰ひつ幾度歟
無始曠劫の昔より
吾らが一ツ闕めかく
如來の深く悲みて
八千八度びの往來の
吾ら衆生を救へんと
華嚴阿含や方等や
皆是開悟の教へあり
衆生の根機は順ひて
八万四千の法りと説

生死の殘害數知れぬ
今日けふの唯今迄
其上亦も迷ふ身と
此土へ度びく出現し
過去此報ひを知らしえて
四十九年の御説法
般若や法華や涅槃迄
秘密非秘密漸頓と
應病與藥の御慈悲より
末の世迄も憐みて

轉迷開悟の頓道は
無量壽經に説くせられ
吾々と導き玉ふあり
五障の女質に至る迄
一度び信を得る時の
菩薩正衆の數に入り
花の淨土は往生し
念佛行者の身の上へと
諸佛護念の証誠は
若不生者の誓ひよて

中にも彌陀の御法りぞと
御慈悲の他力を顯へて
十惡五逆の吾人も
至心同向の御利益は
不退の位に速りよ
娑婆に壽長の尽次第
光壽无量の御悟は
釋迦牟尼佛も説玉へ
本師阿彌陀の招喚は
超世無上の御他力と

十八願の御法りあり
差別選びのまゝまさぬ
上の普賢と初めと
自力と捨て他力入り
皆是入らせ玉ふあり
釋迦牟尼佛の玉とく
無上具足の利益あり
五趣八難の道と超ひ
眞と難値の御法りよて
此經汝も附屬せん

智愚の隔ても善悪も
萬機普益の大悲ゆゑ
文珠や彌勒の菩薩迄
無量壽經の御教へよ
其時彌勒と召し玉へ
此經一念大利よて
其有得聞ざる者は
皆當往生の不退あり
殊勝の法門なるゆゑよ
汝も同く弘めよと

彌勒菩薩の授けしむ
韋提希夫人と諸共よ
彌陀の御法りと信せなば
堯爾と惠美の貞せよ
汝も是と弘めよと
此故耆闍の御山よて
阿難尊者の御說法
觀經再び述べ玉へ
終れば亦も釋迦如來
二十四品の末よりも

亦も多聞の阿難尊
觀經の御坐よ連りて
釋迦牟尼如來御覽トて
即便微笑し玉へて
其儘觀經附屬なり
佛けよ代り玉へてぞ
法華の御坐の大衆の
皆大觀喜なさしむる
残り後との法華經と
説述べ終らせ玉へてぞ

出世の本意顯はせる
押へよ後とい阿彌陀經
諸經諸説の筵とは
我見是利ある故説とは
終ひよ涅槃の雲よ入り
大悲の程社難有や
七百年の後ちの亦
有無の外道と摧破して
復々再興一玉へる
復も衆生と導きて

夫より末と涅槃經
是ぞ一代御化縁の
名號執持と卷納め
舍利弗尊者よ附屬して
衆生化益も終りける
夫より末よ至りての
龍樹菩薩と顯現し
難易の二道明かよ
次よ天親菩薩とて
彌陀の御法りと傳ひてぞ

中夏の鸞師に移るなり
次第は廣く弘まりて
他力の御法りの傳はりて
八家九宗の諸師達も
日よ増し廣く弘れど
繁昌するの仇となり
暫く念佛休まれど
見眞大師の御代とあり
他力の至極とあらはして
日々に夜々よ御繁昌

夫より道綽善導と
後は吾朝源信と
圓光大師の世とあれば
念佛門よ入り玉へ
滿れば闕くる世の倣ひ
罪をき御身よ難と受
復々後ちよ至りてと
在家同事の宗と建
導き玉ふ大悲より
利益と受る其數の

稻麻竹葦の如くあり
八代目よと復も是
八十五年の御苦勞よ
念佛往生盛りあり
過去も未來も知らずして
深く隣みまゝして
大慈大悲の御念力
知るも知らぬも此頃と
彌陀の御法りと花盛り
不思議々々と仰ぎ上

夫より次第は傳はりて
惠燈大師出て玉へ
益々廣く弘まりて
皆是吾らが爲ぞか
辨ひな一は隨往と
彌陀の御法りと教へしむ
末世の今は傳そりて
念佛門よ傾きて
實よもふぎの御誓願
南無阿彌陀佛と唱ふべし

○因果智惠鏡

凡そ此世よ生れては
無病長生き錢金を
病身若死よ貧乏と
前世よ其身が蒔置き
神々様の御身さへ
釋迦牟尼佛の御身よも
孔子や孟子の聖賢も
夫が因果の道理よて

古語 潤色
貴賤貧福押なべて
誰しも願ふ事かれど
いやでもゑるの何故ぞ
種が此世よ這るなり
種々の御難よ逢ひ玉へ
頓ぞ御難と受玉ふ
時よ逢ひぬといわれしも
儘よならぬと云ふもれと

迷ひの娑婆の效ひなり
今の吾身の苦と樂と
今かそ業さの善悪も
悪種時りぬ用心の
若も人目と莊るとて
早く心と改めよ
人目と莊り澄そとも
問ひれていり答ふべき
蔭と日當のなき様と
道と守るよりくいな

誰の人でも省みよ
前世の時一種なれば
後世の苦樂の種ぞり
偽りいぬよりくいな
口と心と違ひなは
悪事と隠しよき様
神と佛けと心と
乃ぞ物事正直よ
毎々律儀招ひめよ
夫なと強ひて祈るも

神も佛も御守りぞ
無病息災繁昌に
善き種時きの心せよ
吾身の上も人の身も
過去も未來も見ゆるなり
前世の種の善きしよぞ
此世で貧苦よせまるかり
遅き早きあるとくも
髮筋丈も違ひひで
鈍なる者よ富貴あり

神や佛けよ守られて
子孫長久福德の
因果の道と信ぜれば
鏡に掛く見る様に
此世で錢金持つ人の
前世よ善き種時うざれば
假令は三世目の前よ
昔も今も同じ事
報ゆるものは因果なり
利口な人も貧とする

貧乏で子供が多くあり
何れも前世の種次第
權威づくよと成難し
情けよ大小あるよよる
非道よ大小有よよる
貪福二つよ這ひ分る
小因大果と云ふ事を
假令ば一粒蒔種の
少一の罪も恐れねば
なす善根の少一でも

富貴で子供のなきもあり
我慢や力らや銭金や
富貴よ大小有る事を
亦た貧賤の大小も
善悪二つよ蒔種の
凡そ因果の理を知るよ
能も心よ意得せよ
實と數づ多く結ぶゆへ
報ふ苦患の限りなし
多くの福ひ得る事も

準ひ知りて用心し
悪の根と断ち葉を枯らす
榮へん事を願ふべし
大罪計り咎と知り
止むる心無時の
流れく大川と
小罪逆も怖れねば
少しの善も積りて
是よ準ひ知りぬべし
慈悲善根の種を蒔け

小善とても捨て積み
善の芽はよ土がいて
斯る謂れも辨ひき
少一の罪の常として
水のした、り何時の間
成往く末を見るよ付
終ひよ地獄の業となる
無量の果報得る事も
人と成る身と思ひかは
遺るも貰ふも因縁ぞ

貧賤富貴の景況の
今貧賤の其人の
富貴も長くつゝねは
慈善の事となし置りば
金銀田畑山林を
衰ひぬれば人れ物
有れば有程足らぬもの
佛の金言辨ひよ
人の恨み入り、るゆる
舛や秤りや十呂盤や

皆是浮世の倣ひあり
昔一長者と思ふべし
盛んよ暮す其中よ
貧よなりても名を残り
いり程貯ひ置くととも
慾よ限りの無もので
事足る事を知れよとの
無理して溜た金銭を
曾て子孫の仇とある
筆の先きよく無理するぞ

愧ちて怖れて慎めよ
虚言程人の瑕のあし
人は美目より心なり
上なき手柄らと思ふべし
家業大事よ勤むるが
先祖や親の孝とあり
物事非道する者の
死ぬれば餓鬼や畜生や
殊よ榮花よ暮す身は
家業大事よ勤るが

美目と能とも富貴をも
高き賤敷押なべて
正直柔和といへる、は
士農工商夫々の
夫が國家の忠義よて
其身も生涯安穩ぞ
生涯人よ悪くまきて
修羅や地獄に墮るあり
前き世よ時よ善後種と
先祖や親の恩送り

親と物事子の爲と
子の爲計り計れども
親の心へ闇とあり
世間は多く見ゆるあり
大恩ありと知りながら
多く不孝するぞりし
亦ハ悪處へ通ふくも
放蕩無頼のあげくよと
親類組合所迄て
家内の者も散々よ

幼稚かき時よ身よ替へて
子供の性根悪くければ
子ゆゑよ迷ふ親達は
夫よ子供を愚かよく
恩を報ざる心かく
賭博打たり盗んたり
身の分限を忘れ果く
政府に咎めを蒙りく
迷惑掛る而已からき
家財田畑屋敷迄て

他人の物とするからは
不孝と云ふも余りあり
烏をよ反哺の孝がある
烏や鳩よも劣るあり
能も辨ひ大切よ
各々能も目を塞ぎ
いりかる大福長者でも
金銀財寶妻子迄
冥途の旅立ちする時の
往えも知らぬ死出の山

親の歎きといり計り
鳩よ三枝の禮あまは
親よ不孝の子供社
親を持たる人々を
父母よ孝道盡す様
ツタ／＼考ひ見玉へや
時節到れば是非もあひ
捨て冥途に旅よ立つ
耳も聞ひず目も見へせ
闇路よ迷ふぞ憐れなり

其時一生造りよ
病苦や死苦に攻られて
いふは後悔するに
後生の已々の稼ぎよて
兎角命の有中に
人の命ちぢもろき事
今宵頭痛が仕始めて
今朝迄機嫌の能き人も
今日他人の葬禮歎
妻子財寶我身迄で

罪科が業が報ひ来て
七顛八倒する時よ
更らに歸らぬ事ぞり
助合力のあらざれば
菩提の種を蒔置けよ
草葉の露は異ならず
直に死病と成るもあり
暮よと頓死するも有り
明日の吾身の葬式歎
皆は無常の物なれば

吾物逆は何もな
口に賢くいへながら
俄に無常に誘はれ
いとへ妻に別れり
世にさき事の有様よ
遣る方なき悲しさよ
歎く思ひも過ぬれば
程無く元の平六と
亦々邪見を起すあり
謂れを能も聞よとい

無常くと人毎に
心に耽と知らぬゆる
可愛孫子に後れたり
亦は夫とよ死なれり
共は消度思ひよ
尼法師よもあらばやと
何時に歎夫も忘果
成而已ならぬ殊更に
夫ゆる日頃佛道の
兼く佛祖の御教化ぞ

乃て御法りを聴聞し
眞の佛果に入ぬれば
光壽無量と聞時ハ
生々世々が父母や
自由自在に濟度しく
花の樂み得るとある
心の儘にならざるハ
乃と老少定らぬ
智識に逢ふと聽聞し
冬の綿入夏一と衣

後世の大事を意得せよ
横病横死の難もあく
六神通の悟り得て
孫や子供や親類も
無量永劫永々劫
此世ハ勘忍世界とく
火宅の娑婆の印ゆゑ
明日の受合あらされば
後世の大事を覺悟せよ
三度の食の用意をば

忘れぬ求め置ながら
後世の大事を忘るとハ
能も考ひ見るがよハ
程ある様ハ思ひよハ
其場が直ハ未來ぞや
再び時節ハあるまトと
後世の大事を聞がよし
聞信無疑ハすがりあは
正定衆の身とはあり
花の淨土ハ参らう

大事が中の一大事
本ハ愚かを吾身を
來世といへば皆人ハ
突息一つ歸らねば
此度ハ苦界と離をば
早く心と改たえて
夫にと彌陀の御他力ぞ
すがる思ひの一念ハ
何ん時死のふが終ろふが
頂く事の仕合せは

念佛行者の身の上を	聞ひし信の真とから
御恩報謝の勤めよと	常し四恩を辨まひと
父母の孝道つくす様	國王天廳の御恩よは
國家の益と計るぞ	家業大事に働く様
衆生に恩を報ふよは	有縁の人を誘ふての
佛教眞理を導びきて	二世の幸福仰ぐ様
三寶の恩を報ふよは	禮拜恭敬尊重し
香花燈明御掃除や	夫々能も氣を付けと
朝夕二度の御禮とは	心よ懸て闕かぬ様
御恩御慈悲の御稱名	南無阿彌陀佛

○見
大師 御降誕會讚歎歌

敬禮大慈の阿彌陀佛
 安養無漏の寶國の
 劫濁見濁煩惱の
 命も濁る世の中と
 此土へ能も御誕生
 天津兒屋根の命をより
 夫より十九の世に當る
 松若君よ在まいて

或説 潤色

妙教流通の爲よとて
 花の臺と後とにいと
 日々に彌増衆生濁
 深く憐みを在まいと
 父は有範御系圖を
 三十九世の鎌足公
 御孫さまとある事は
 母上さまは源との

義家公の四男なる
 贈内大臣爲義の
 次男の先生義賢の
 御子六條藏人の
 仲家公の御娘
 吉光女をば申しける
 承安二年壬ひの
 辰の五月二日の夜
 机に寄る居玉へは
 西の方より金色の
 光明赫き三度迄
 御身とめぐり口中へ
 飛入玉ふは驚きく
 西の方とぞ御覽せば
 如意輪観音空中に
 一尺計の松枝を
 持て立たせ玉ふよぞ
 是とと計り禮拜し
 拜み上ぐれば夢ぞかし
 寄異の思ひの其余り

翌日然りも其旨を
 有範卿えの玉へは
 有範卿の仰せよと
 夫は就てと吾兼て
 一子の無と悲みて
 折々長谷の観音に
 男子と一人の賜されと
 祈誓と籠り事あるが
 空しからざる御告れ
 正さ夢かりと御満悦
 夫より光女と身を守り
 悪敷色香も見玉のき
 悪敷聲とも聞ぬ様
 堅く御身を慎みて
 行儀正敷おわせしよ
 月日も已に満々て
 十二箇月の月と逕て
 能も御安産あられし
 夫が即ち吾祖なり
 頃の人皇八十代

高倉院の御宇として
月の初めの朔日
方今陰曆廢せられ
五月二十一日の
月は一度は御日柄の
五月二十一日の
御日柄ありと思ひ上げ
有まへんのであるならば
法藏因位の本誓を
聖道自力の御教への

承安三年四月ある
御降誕ありし事なるの
大陽曆で推歩せば
眞の御正當降誕會
例月毎にあるかれど
殊に稀なる難有き
若も吾祖の御出世の
云何がどうして難信の
明暮常に聞うれふぞ
八万四千と數あれど

難行苦行の法あれば
後生大事と思ひども
智徳もなげや願もな
迎なられぬ吾々を
塵點久遠の阿彌陀佛
世自在佛の御所にて
衆生代苦の御修行の
愚痴の吾らぞ助けんと
南無阿彌陀佛と正覺を
機法一躰は成就して

時機に合ねば益もあ
佛法非器の吾々を
修行ならねば佛けよ
一番掛の御目當
法藏菩薩と謙り
大誓願を發されて
無量永劫永々劫
超世無上の誓願を
凡夫が佛けよ成る因を
十劫已來の招喚を

嚮流十方の大音で
喚掛玉ふ御聲をも
聞氣もかけよや疑ふて
生死の海に流轉して
迷ふ子供茂捨兼る
御恵み深き御情けは
居るに居られぬ大悲より
來るとあるの御苦勞の
祖師とあらわれ玉へてぞ
夫は生涯家持たせ

來れよおへよ參れよの
今日迄も吾々の
よくなき年月重ね宛
是迄永く迷ふた茂
親の御慈悲のやるせあり
獨り淨土に樂みて
吾が使ひに吾が亦
彼尊直々此娑婆え
墨の衣に墨の袈裟
或の野に伏し山に臥し

衆生濟度の其爲よ
運ばせ玉ふ御大恩
恐も多し御蔭より
御流波の身とあるを
昨日も今日も其明日も
聖人さまの御念力
御他力さまの御勸め
坐禪もせねば觀念も
聞得る計の御法りゆゑ
明暮此世の世渡りに

往きつ戻りつ歩行素足
思ひ上ぐればあぐる程
此度び殊も吾々の
あゝら嬉や雜有や
聽聞させて頂をそ
實は大悲の御蔭なり
智恵も入らねば才覺も
何んにも世話のなれ様に
頂き易く聞安く
身とは委ねありながら

罪を障りの海山の
南無と歸命せしむれば
淨土参りは究まりく
やれ嬉やそ日を送り
心多歡喜の利益迄
天下和順の利益迄
蒙る事の嬉しそと
説に説られぬ御惠みと
残らず御貰ひ申してぞ
聖定衆の身の上へと

徒々者が一念で
業事成辨するゆゑよ
壽長の爰よあふ中と
常行大悲の利益りら
務修禮讓の利益りら
其他無量の御利益茂
云ふにいはれぬ大功德
不可思議那由多の功德を
作さぬ功德の主となり
廣大勝解の身の上へと

仕立て御貰ひ申して
觀音勢至と勝友と
御譽の御褒美あられし
頂き申すと云ふ事の
諸佛菩薩の御守りの
天神地祇の御守りの
乃て悪魔や外道との
斯ふ尊とき御利益の
亦とあろふ譯でなし
六字の謂れ聞事ハ

釋迦牟尼佛よの親友と
善導大師を五ツ通ふり
思ひふよらぬ名譽迄
云ふよいはれぬ果報者
夜ると晝とよ隔てかく
形ちよ影の添ふ如く
怖れく遠く逃去ると
大千世界を尋ねても
無上殊勝の本願の
多生曠劫の間よも

逢ふ事からぬ聞難い
 假令炎ほの中をても
 夫よ吾らと何事ぞ
 誘ひ誘われ何時も
 義理もも聞よやならぬ様
 是非聞せよや置まへの
 一天四海に往渡り
 田舎々々の山奥も
 自由自在に聞かれるの
 御恩徳を承御恵ぞ

難中之難の御法りとは
 分けて聞けよやある中よ
 昨日も今日も唯今も
 参らよやからぬ人目よも
 厭ひ嫌ひて逝た身も
 大慈大悲の御情けと
 益々繁昌末廣く
 海上走る船人も
 是ぞ偏ひよ吾祖師の
 今日此土の御出世の

ほんよ嬉敷難有き
 御日柄なりと思ひ上げ
 分けて勇て喜びて
 御降誕會の御祝よ
 詩あり歌なり發句なり
 益御法りよ盛大よ
 勇敷社述る様
 是ぞ誠の降誕會
 今歳の然も明治での
 二十一日今日の日の

五月二十一日の
 御流汲の人々を
 何よ取敢へぎ第一よ
 各何れも進みてぞ
 能も御讃歎申し上げ
 末よ導びく善巧を
 夫が真との御同行
 乃が真との遺弟ぞ
 二十余年の五月ある
 見真大師の降誕會

不定の壽も存ひて
嬉敷儘は勇敷
心は浮ぶ其儘と
吾親睦の方々と
喜ぶべきの一端は
思ふて唄へ申すなり
御賛成あるの方々の
何は取敢へき思ひ上げ
御恩御慈悲の御稱名

今歳も頓て逢しよぞ
讀歌よせて述べしもの
筆は任て記せしもの
共は佛祖に御恩徳
千は一ツもなれりしと
上來述ぶる意味柄は
鬼はも角はも南無阿彌陀
思ひ上げたる上へからと
南無阿彌陀佛

明治廿六年七月十一日印刷
明治廿六年七月十五日發行

定價金七錢五厘

編輯者兼發行者
巖手縣盛岡市三戸町貳百番戸
小泉祐山

印刷者
巖手縣盛岡市新穀町八拾五番戸
藤村伊兵衛

發行所
巖手縣盛岡市新穀町八拾五番戸
旋龍舎

